

歌代 勤さんを悼む

糸魚川 淳 二

歌代 勤さんが長い闘病生活の後、亡くなられた。心からおくやみを申し上げたい。長い間研究・教育生活を送られ多くの業績を挙げ、人材を養成された。特に、生痕および生痕化石の研究に全力をそそがれ、多くの研究報告・著書は、日本で遅れているこの分野の研究の要となるものであった。千葉県稲毛、福島県松川浦などの現生生痕の調査、それらを化石に応用した魚沼層群の研究などがそれである。研究は団体研究で行われ、グループの中から多くの研究者が育った。これから、これらの方々が成長されて、生痕化石研究がさらに進歩することを望みたい。

私事にわたるが、歌代さんの思い出をつづってみたい。最初にお目にかかったのは1960年頃だったろうか、化石研究会の第1回の例会の時であった。会の翌日、古生態グループの生痕観察の巡検が行われた。目的地は三浦半島の城ヶ島で、おめあては穿孔性貝類の生痕である。当時、瑞浪層群の穿孔性貝類化石の研究をしていた私は喜んで参加した。当時の東京教育大学付属盲学校のバスを借りての一日ツアーであった。歌代さんはリーダーで、すべてをとりしきっておられた。天気がよく、行きかけの車中から観察・採集、帰途まで、しゃべったり、歌ったり、にぎやかで楽しい一日であった。途中、スピード違反でパトカーに捕まり、運転手さんが優良運転手さんだったので無罪放免という一幕もあった。桑野幸夫さんが一緒だったが、すでに亡い。秋山さん、赤木さんも参加されたと記憶している。

一緒にお仕事をする機会はなかったが、学会や集会ではよくお目にかかった。人なつこい笑顔で、独特の越後弁で話をされた。いつだったか、「もう稲毛の海岸がだめになるので、お別れに行って来ます」と言われた時、失われてゆく日本の干潟を悼んでか、淋しそうな表情だった。

最近、生痕についての本が何冊か出版された。すでに病床にあられたので、歌代さんの名前はそこには見られない。しかし、中心となられた大森昌衛さんは歌代さんの永い間のご友人だし、多くのお弟子さんが加わられている。歌代さんのお仕事の、最後のまとめともいえるべきもので、まさに、輝かしき経歴を記した墓碑銘であろう。歌代さん、安らかに眠りください。

◆本の紹介◆

池谷仙之・山口寿之著 (1993) :
進化古生物学入門—甲殻類の進化を追う
148頁, 1648円, 東京大学出版会

地質学教室に在籍して古生物で卒論を書くとする学生は、化石を材料としなければ、かつては指導教官がいい顔をしなかった。「現生をやりたいなら生物学教室へいけば」と嫌味のひとつも言われたものである。というのも、古生物学といえどもっぱら記載・分類と生層序学であり、化石の地質年代示標としての側面だけが注目され、生物としての側面が等閑視されていたからである。ところがこの分野は、すでに今世紀初頭にオーストリアのABELがPalaeobiologieとして創始していたもので、昨今わが国でもようやく認められつつある。本書の題名にある進化古生物学とはこの分野のことで、古生物科学、純古生物学、生物学的古生物学などと訳されることもある。

しかし実をいえば、これこそが真の古生物学なのである。出てきた化石の記載に終始する古典的古生物学は、殻や骨といった生物体の一部だけを相手にしていたために、現生生物学の分野からは低く見られていた。ところが、化石に限らず現生までもふくめて扱うようになると、軟組織を媒介として硬組織の機能的理解が深まるうえ、現生だけでは知り得ない生物の歴史的背景を理解しやすくなる。つまり生物学に時間軸をもちこんだ時間生物学とでもいえるべき観点である。こうなると、ヒエラルキーが逆転して、生物学が古生物学のうち、現世の一断面だけを扱う一分野となる。

本書は、まもなく100号で完結するUP BIOLOGYにたった一冊だけの古生物学書であるが、生物を志す学生がこれによって古生物学に転向するかも知れない。また、地質の学生でも指導教官に気兼ねなく現生を扱えることになる。なにしろ古生物学会の重鎮が執筆しているのだ。いい本が出たものである。(犬塚則久)